

宇陀水銀をめぐる古代史上の諸問題

松 田 寿 男

内 容

- 一 宇陀の入谷
- 二 血原の伝説
- 三 二つの丹生神社
- 四 水分神の問題
- 五 宇陀の水分神社
- 六 式内社への疑惑
- 七 磐余彦伝説
- 八 丹生川上の神事
- 九 丹生神社と丹生川上神社
- 一〇 丹生川上神社の比定

む す び

大和の奥地を歩く機会に、私はたびたび恵まれているが、そのたびごとに記紀の伝説が批判精神の欠如と科学の裏付けがないままに曲解され、あるいは誤解されているのではない

一 宇 陀 の 入 谷

まず宇陀の奥に入谷（にうだに）という部落があつて、そこに丹生神社が残っていることから筆を起すことにする。

近畿日本鉄道榛原駅の南八キロ、奈良県宇陀郡菟田野町字大沢に大和水銀鉱業所が栄えている。これは北海道のイトム

かという疑いを深めた。とくに奥宇陀の山々から深い谷を刻んで流れる水が、野におりようとするあたりにひろがる丘陵地帯が、いままです歴史学からも考古学からもほとんど閑却されているにも拘わらず、意外にも古代史上に重大な役割をしているのに注意された。幸にも早稲田大学の矢嶋澄策理学博士および大和水銀鉱業所の井上純一所長の支援を得て、現地に再三の科学的調査を行うことができたので、⁽¹⁾その際の成果を裏付けとして私の意見を簡単に書きつづつておきたい。試料の採取と分析に絶大な協力をおしまれなかつた前記の両鉱床学者に厚い感謝の意を表する。

次に次ぐ日本第二位の水銀鉱山であつて、本州で稼行されている水銀鉱山としては現在唯一のものといつてよい。この大和水銀鉱業所から東北に山合いをたどると、大神という注目すべき部落（後述）を北の山腹に仰ぎつつ、約二キロ半で入

谷と呼ばれる山中の別天地に入る。標高四二〇メートルから四五〇メートルに及ぶゆるい傾斜を見せて南南西面するこの小盆地には、水田が階段状に敷きつめられ、十軒あまりの農家（現在は十二戸）が散つている。⁽³⁾背後には入谷山（標高六〇三m）がそびえ、そのふところからは入谷川が流れだしてこの盆地をうるおし、末はこの盆地の南を限る念火山（標高五四四m）と矢倉山（五〇〇m）との間を割つて、芳野川に注いでいる。

芳野（ほうの）川は、宇陀川を構成する東の主流である。

そのために宇陀地方では東川とも呼ばれ、榛原町から高見山へ向かう古道を導く重要な川となつてゐる。もちろん往古に大和と伊勢とを結んでいた道にはかならない。いま菟田野町の中心となつてゐる古市場は、この道の上に生れて、その名が示すとおり山地と野との間の物資の交換を掌り、あるいは奈良盆地と吉野地方との間の物資の媒介に活躍した歴史ある街村であるが、ここから入谷に向かうには、芳野川に沿う前記の古道をとり、東進し北折するわけである。これが正面から入谷を訪れる道であるが、前記の二つの山にはさまれた関門があまりに狭いため、入谷はまつたく山に閉ぢこめられていて、この山奥に小盆地があるとはとうてい考えられない景観を呈している。まさしく入谷は、さきほどの形容そのままの別天地である。この別天地には、北の入谷山から五つ

の山すじが小半島さながらになだれだしている。そのうち中央のものは、小盆地の中心近くまで及び、その末端の小高いところに老杉の木立を群らせ、そのなかに丹生神社の小祠を包みこんでいる。

私の知る限り、この神社の存在を報告した記述は、わずかに「奈良県宇陀郡史料」に見出されるだけである。曰く、丹生神社。宇賀志村大字入谷鎮座。境内四〇〇坪。祭神不詳。或は丹生川上大神なりと。例祭十月二十日。村（入谷）の中央に叢地あり。元丹生神社の境内なり。叢中に土壇ありて自然石を置く、即ち社壇の跡なり。神社の上方人家の増殖するに随て、現在の位置に遷座せしものなりと伝う。入谷、元は丹生谷と書せり。或は云う、神武天皇の丹生川上に祭り給うは、此地ならんかと云えり。入谷の地勢、宇陀川の上流より北折して一谷をなし、関門狭く、行行広濶の地にして、南北西の三方、山岳を以て囲み、中央よりは吉野・宇陀の連山を一眸に収むべし。

と。まことに要を尽した叙述である。ただし祭神について一説を挙げ、丹生川上神社の祭神（ミズハノメ）と同神だといてゐるのは、丹生神社と丹生川上神社との混同から出た謬説で、丹生神社の正体が明かになつてきた今日では、その祭神はニウズヒメ（丹生都比売）とすべきである。丹生川上神

社については後に詳考する。なお、私は先年奈良県高市郡高取町（旧船倉村）の丹生谷に式内の大仁保神社を調査したが、このとき附近の老人がこの社の祭神を「丹生川上神社の祭神のオバサン」と表現したことを思い出す。ニウズヒメが、朱（硫化水銀）の採取を特技とした丹生氏の祖神であり、朱の女神であるというその正体は、昨日までこのようにヴェールに覆われていたのである。

問題の入谷は、現在では菟田野町の一字であるが、「宇陀郡史料」も注意しているように、もとは宇賀志村に属し、その北詰に位する山奥の一部落であつた。また同書がその地名を古く丹生谷と書いたと伝えているのも重要である。入字の悉くが丹生二字名の簡略化とはいえないが、このばあいにはそこに残されている丹生神社が物をいう。というのも、他の多くの例が示すように、この名称をもつ神社の鎮座、つまりニウズヒメ祭祀は、丹（に）の生まれるところ——現代風にいえば朱（硫化水銀）の産地——のうち、とくに丹生氏の拠点に選ばれたところに見られたからである。それならばこの入谷が、もともと丹生あるいは丹生谷と書かれたことは、そのまますなおに受取つてよく、この地を古代の水銀産地と推定することは、許されるであろう。もちろんこの推定には自然科学からの裏付けが必要である。私が現地にたびたび足を運んだのは、このような目的からである。

さてこの入谷と呼ばれる小盆地は、いわゆる菟田山の山塊によつて西側を包まれ、とくに山塊の一部は、前記のように関門を作つて谷の南境を閉ざしている。このいわゆる菟田山は、最高部で標高五〇〇mくらいの丘陵状の山のむれであつて、その南麓の街道筋には古市場および松井の両部落を発達させ、その西端部には大和水銀鉦山を配している。しかもこの山塊一帯こそは宇陀水銀の中心であつて、現在休山中か、あるいは閉山ないし廃棄された鉦坑を含めて、すくなくとも七か所の水銀鉦坑をもっている。とくに入谷に達しているその東端部（念火山や愛宕山を主とする）には、大和水銀鉦山とまさに東西呼応するかのよう、水銀の旧坑が支柱もなおそのままに、しつかりした坑道を残している。太平洋戦争中に稼行されたものという。

私たちはそのいわゆる入谷旧坑を調査し、かつその傍らの路端にみごとな辰砂の露頭を発見し、また附近の山腹に現地の人たちが風穴と呼ぶものを訪れた。この洞穴は崩土や碎石岩屑のためになかば入口を閉ざされているが、矢嶋博士や大和水銀の井上所長の鑑定によつて、その掘り方からして古い鉦坑であると認められ、かつ坑道の天井には水銀〇・六八％を含む辰砂脈が走つてることが判明した。いうまでもなく古代水銀坑の残体にはならない。ことに洞穴の附近には「竜王祠」の石標があり、水銀坑を基盤とする修験道の名残

と認められる。私たちの調査はせまい入谷盆地のほとんど全域にわたり、さらに部落を北にぬけて入谷山の斜面に達し、宇陀の花崗岩地帯が石英粗面岩地帯とふれあう部分にまで及んだが、その結果、この盆地の表土には○・○一八％という高品位の水銀を含む部分があることを確認できた。入谷すなわち丹生谷が、古代の水銀産地として立派に資格をもつことは、明かではないか。

つまり宇陀入谷が、紀和半島を横に切る中央構造線（メデアン・ライン）の北側に、それと平行して生じた水銀鉱床群の主要部である菟田山水銀地帯の一部に属することは、疑いをいれない事実となつた。それならば、現在ではほとんど見捨てられてしまつたかに見えるこの山奥の静かな谷には、古墳時代よりもつと以前に、古代人が朱の利用を知りはじめたころ、その技術をもつ丹生氏の一部が早くも住みついて、朱砂（辰砂）の採取に従事し、谷の中央部に祖神ニウズビメ（朱砂姫）を祀つていたにちがいない。⁽⁶⁾

なお入谷という地名は、近畿地方から関東・北陸にかけて

二 血原の伝説

宇陀の水銀地帯が早くから注目されていたことを立証する材料がもうひとつある。それは血原の伝説にほかならない。

「古事記」中巻および「日本書紀」巻三に、神武天皇すなわちイ

分布しているが、その主要なものは次の如くであつて、調査の結果いづれも水銀鉱床と深く関連することが判明した。地名と分析値とを掲げておく。

奈良県高市郡明日香町入谷（にうだに）

水銀○・○○○六八％

滋賀県高島郡朽木村小入谷（おにうだに）

水銀○・○○○六％（永江秀雄氏調査）

滋賀県犬上郡多賀町靈仙字入谷（にうだに）

水銀○・○○○四％

岐阜県揖斐郡徳山村入谷（にうだに）

徳山水銀鉱山所在地（矢嶋博士調査）

富山県婦負郡八尾町入谷（いりたに）

水銀○・○○○五％（永江氏調査）

栃木県足利市入谷（いりやつ）

水銀○・○○○三一五％

これら諸例は、入野・入山などの場合とともに、不日詳細を報告するつもりである。

ワレヒコ（磐余彦）にまとわるウカシ（宇迦斯・猾）兄弟の話として、それは伝えられている。エウカシ（兄宇迦斯）すなわち兄のウカシがイワレヒコを謀略によつて打取ろうと

し、大殿のなかに押機をしくむ。オトウカシ(弟宇迦斯)すなわち弟のウカシがその計を知つて、これをイワレヒコに告げる。その結果エウカシは、自分のしかけた押機に打たれて死ぬ。その死体を斬つたところ、したたり流れた血が踝を没するほどであり、いつまでもそれが消えなかつたので、「其地を宇陀之血原となん謂う」とある。

血原とは辰砂(朱砂)が赤く一面に露頭していた景観からでた呼称であろう。もちろんこのことは、太古の人たちにとつてもなみなならぬ関心事であつた。しかしそれを、我々がいま話すように、直接の表現形式で伝えることは、当時として考えられないし、たとえそうあつたとしても、口から口に伝わるうちに消えてしまう恐れがある。だから、伝えるべき事実が重要であればあるほど、重大な、そして伝わりやすい話が附会され、その話によつて事実が保護される。この点に意を用いないで、ただからませてある話だけを、つまり話の皮相だけを、現代の頭で解釈し、すべてをいとも簡単に抹殺することは、却つて非科学的というそりを免がれないであろう。記紀や風土記を見ると、血原の伝説だけでなく、同様に辰砂の露頭ないし堆積を流血に見たてて、血田・血浦・血川また茅原などと呼ばれた例は、数多く、かつ全国的に散布している。このことは前の論文でいくたびも述べたから、いまは繰返さないが、それらがみなそれぞれに伝わりやすい話

や英雄の行為と関連づけてあるのに注意し、「火のないところに煙はたたぬ」というコトバの意味をよく考えて、古代人に笑われないように心がけようではないか。

そうなると、私には辰砂の露頭を証明する義務が負わされたようである。いま古市場とともに菟田野町の中心街となつている松井の部落から宇賀志川について南に三キロほど遡つた山合いに宇賀志神社がある。神武天皇に忠節をつくしたオトウカシを祀つた社といわれるが、おそらくウカシ族の祖神の祠であろう。ここはもと宇賀志村の上宇賀志で、社のあるところを森の堂と呼び、社側を流れる宇賀志川に架けられた橋を血原橋と称している。橋名からしても、この土地に血原という呼び名があつたことは、ほとんど疑いをいれないし、一方、私が現地から採取した土壌試料は水銀含有〇・〇〇一%を示した。

従来の史家の多くが記紀の血原を宇賀志村に比定した通説は、このように理由づけられる。しかし、もう一步進んでみると、血原の名が逆に伝説から、ウカシの名をもつこの土地に附会されたという疑いもでてくる。したがつて「大日本史」の注釈者がこれを別地に比定したのも、むげに排斥はできない。その第二の血原は同じ宇陀郡の上田口に見出される。すなわち宇陀郡室生村大字上田口小字血原にほかならない。女人高野として有名な室生寺から、同名の川がほりさげた深溪

を、流れなりに曲りくねつて六キロほど遡ると、急に視界が開けて、山間の小盆地が現われる。これを血原と呼び、室生川に架る橋を血原橋という。神武天皇伝説とはおよそ縁のなさそうな僻地であるが、その附近一帯は室生寺の周辺のような石英粗面岩ではない。ちょうどこの小盆地の手前で岩相は前記の宇賀志村と同じ花崗岩に変つている。そして、ここから私が採取した試料は、水銀含有 0.0002% の分析値を示した。

大日本史の注釈者は、むしろ辰砂の件は全然考慮しないで、ただ血原の名が宇賀志村の字名になく、却つて上田口村に残つていたところから、單純に異説を唱えたのであらうが、とにかく血原伝説の候補地は宇陀郡内に二か所あり、しかも二つながら表土にほぼ同値の水銀含有を告げるのである。

矢嶋澄策博士の学説によれば、地表に水銀 0.0005% 以上の含有を示す土地は、地下に水銀鉱床の存在を認められるという。また私はこの学説を呑みこむために、先年大和水銀鉱山の表土について調査し、地下に高品位の辰砂を埋蔵しながら、その表土の水銀含有は 0.0002% ないし 0.0006% であることを確かめている。もちろん母岩の傾斜を考慮しての上である。こうなると、血原の比定は、イワレヒコの話が結びつきそうな土地であることと、太古に二地のどちらに辰砂の露頭がありえたか、という二点に帰する。前者か

らずれば、菟田野町宇賀志が断然有力であり、この地点が吉野や伊勢と大和の国中（くになか）とを結ぶ交通の要衝に立っていた点も、大いにそれを助ける。しかし後者の自然科学からする裏付けは、もはや私には手が出せない。そこで私は井上純一所長に依頼して宇陀地方の辰砂鉱の偏位や母岩の傾斜度からの所見を求めたが、その結果、鉱床学からの軍配もまた宇賀志村にあがつた。上宇賀志には辰砂の露頭が充分にありえたというのである。

宇陀の水銀が太古いらい衆目を浴び、かつそれが利用されていた形跡は、このようにして明かになった。宇陀地方のうちでも水銀地帯の主要部と認められる今の菟田野町の地域が、古代史の舞台としていろいろな伝えを残したのは、むしろ当然ではないか。

この地域が朱砂（辰砂）の産地として、いわば古代鉱業の一中心地として断然光つていたことは、「万葉集」巻七・雑歌に、

大和の、宇陀の真赤土の、さ丹著かば、そこもか人の、
我を言なさむ。

という一首によく現われている。なんとなれば、ここに見える「宇陀（菟田）の真赤土」こそはこの地で産出される朱砂（辰砂）でなければならないからである。周知のように、この歌の首部「山跡之宇陀乃真赤土」は一般に「やまとのうだ

のまはに^(?)と訓まれている。しかし^(?)はに^(?)は^(?)壇^(?)すなわち粘土のことである。したがって^(?)まはに^(?)は純粋の粘土、すなわち白陶土 (Kaolin) あるいは白鉛鉱 (Cerussite) と解すべきであつて、朱砂のような赤色の土ではない。万葉集の原文に「真赤土」とあるにも拘わらず、これに「真壇」と同じ訓みをあてるのは、なんとも腑に落ちない。赤土は「赭」を指し、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) すなわちベンガラであるから、「真赤土」は「真赭」でなければならず、これこそは朱砂・辰砂 (硫化水銀 HgS) にほかならない。同じ「万葉集」巻十四下・東歌のなかに、

真金吹く、丹生の真赭の、色に出て、言はなくのみぞ、
我が恋うらくは。

とあるのは、その証拠となる。原文は「麻可弥布久、爾布能麻曾保」云々であつて、麻曾保 (まそほ) に真赭の二字を宛ててあるではないか。純粋の赤土すなわち朱砂を「まそほ」と称した例は、万葉集からなおいくつか挙げられよう。例えば、その巻十六に池田・大神・平群・穂積の四朝臣の間でたがいに他の悪口をいいあつた歌が見え、そのなかに鼻の赤いのを朱を採る岡にたとえた二首がある。一には「仏造る真朱」、一には「真朱穿る岳」という句があり、真朱は真赭と書換えて「まそほ」と訓ませているが、前者はアマルガム法による仏像の鍍金を、後者は水銀鉱業の存在を立証する貴重

な歌である。また前掲の東歌に見える枕詞の「真金吹く」とは、黄金のアマルガム精錬を意味し、かつ真金が黄金でなければならぬことは、すでに詳考しておいた。⁽⁸⁾

要するに、万葉集に見える「宇陀の真赤土」は、宇陀産の朱砂 (水銀の原礦石) をいい、マハニでなくて、マソホとよむべきである。それにつけても、江戸時代の古典研究家が壇土と赭土との区別を閑却し、また壇と真壇、赭と真赭との差異を追求せず、それがそのまま今日にまで引継がれ、「真」がいまだに発語などと解されているのは、まづたく遺憾なことといわなければならない。

古代の史的記録は、とかく朝廷中心であり国都中心であるから、地方の鉱業生産の状態や鉱物処理の技術などを直接に伝えていない。それは当時として当然であつたとしても、歌は例外であり、正直である。そのような事実を伝えようという意識をもたずに、あるいは点景的に、重要な事実をよみこむ場合がある。この点に歌の比類ない史料の価値が見出されねばならない。万葉の歌は、そうして歴史の欠を補いうる好例であるが、ついでに私は万葉集の「真金吹く丹生」を裏付けて、朱砂の産と丹生との深い関連を示す例をもうひとつ挙げておきたい。これは室町時代のものであるが、釈正徹の歌集である「草根集」のなかに、「名所杣」と題して、

ねを絶て、消ぬ立木もあれぬへし、水の金ほるにふの杣

山。

とある。「水の金」すなわち水銀（みづがね）を採掘している「にふ」すなわち丹生（万葉集の爾布）という事実が、も

三 二つの丹生神社

宇陀郡に血原の候補地が二か所あつて、だいたい手間どつてしまつたが、ここで丹生神社の問題に立返ると、これも宇陀郡内に二社を数え、そのためにかなりの混迷を生ずる。一社は菟田野町入谷のそれであるが、もうひとつの丹生神社は宇陀郡榛原町大字雨師小字朝原に鎮まつている。ここは、近鉄榛原駅から西に、桜井への街道を三キロばかり進んだ地点から北山の山腹に一キロほど登つたところで、登り道の中間に雨師の小部落がある。神社は東南面して標高約四〇〇m、街道との標高差は約一〇〇m、背後は四八〇mの山をへだてて初瀬の谷に、前方は宇陀川の一支筭間川がひらいた細長い水田地帯に臨んでいる。私の調査（昭和三八年七月三十日）では、街道から雨師の部落にかけて、また筭間川畔の安田・筭間の両部落にかけて、赤色土壌の露頭が点々と認められ、それらにはだいたい〇・〇〇〇二―五％の水銀が含まれていた。したがつてこの丹生神社が丹土に関連することは充分に考慮できるし、かつこの社がニウズヒメ祭祀にはじまることを領かせる。しかし、鎮座の土地が雨師と呼ばれている点は、

宇陀水銀をめぐる古代史上の諸問題 松田

ともとそのような生産に無関心な文人によつて、無意識に伝えられているではないか。なまじ意識して書かれた文章よりも、史料的价值ははるかに高いと評してよいであらう。

いささか気になる。

この神社には永享三年（一四三一年）すなわち足利義教將軍のときに書かれたという社記が伝わっている。曰く。

倭国菟田郡丹生神社者、祈雨・止雨神也。神武天皇元年將征長髓彦及兄宇迦斯・弟宇迦斯。此時菟田行幸被為在、祈天神地祇丹生朝原（亦朝廷原）、云云。是に於て天下平治仕賜。廢帝天平宝字七年五月、奉幣於畿内群神。其丹生雨師者、加黒毛馬、旱也。宝龜六年九月、遣使奉白馬及幣於丹生雨師・畿内群神。霖雨也。不聞人声之深山、再立我宮柱、以敬礼者、為天下降甘雨、止霖雨者也。霖雨・止雨・祈雨の神祭爾。因て村名を号雨師、云云。

丹生川上雨師祭神

丹生都姫命

罔象女尊

伊弉册命

右三柱御神殿本社之神

撰社

神倭磐余彦大神」葦原醜男大神」

末社

高竊大神」鳴雷大神」健經津主大神」大山祇大神」金山毘古大神」塞三柱大神」

右十三神社、祭有之候。

中古に於ては、宇陀郡百八ヶ村之郷総社、

(中略)

大和国宇多郡雨師村

丹生川上雨師

朝原丹生本官社

弥宜 小林長右衛門大神豊秋

弥宜 小林庄輔大神正義

神主 小林帶刀大神春長

と。なんともシドロモドロの和製漢文と和文のミックスではあるが、奥書に、

往古より社記書類、数多蠹虫喰有りて、難相分候に付、

為今後、此度書換置候。

とことわつてあつて、永享三亥年正月の紀年が見えてゐる。

だから、すくなくともこの文書の前文は永享三年より古く書かれたものの転写といえるが、それはとにかくとして、このころ鎮座の土地がたしかに雨師村と称されたこと、およびこ

の村名の縁起が明白となるし、同時にこの神社が吉野郡の丹生川上神社を模倣したことも、疑いをいれないであろう。私のはかつて吉野の丹生川上神社と丹生神社との關係を考へて、丹生神社は丹生氏の祖神ニウズヒメ(文書にいう丹生都姫)を祀る祠として起つたものであるが、のちに神武天皇の丹生川上における神事を記念する社とされ、水神ミズハノメ(文書に見える罔象女)が祀りこまれて、丹生川上神社に改まつた、と解釈した。このような祭神の変化の過程は、この文書に掲げられてゐる三柱の主神のなかにもよく示されてゐるではないか。

ところがこの文書の前文を見ると、その記事がけつして權威あるものでないことが、すぐわかる。まず最初の神武天皇元年云々は、古事記・日本書紀に伝わる話を作りかえたもの(後述)であり、天平宝字七年と宝龜六年の奉幣記事は、「続日本紀」巻二十四および卷三十三のそれに依り、続く不聞人声云々は、「名神本紀」の引用にすぎない。しかも、これらの引用には、微妙な作為があるのに注意されよう。名神本紀の文は「類聚三代格」に収められてゐる寛平七年六月二十六日付の太政官符にも引用されてゐるが、それと対比してみると「人声を聞かざる深山の吉野の丹生川上に我宮柱を立て」とあるのを、「人声を聞かざる深山に再び我宮柱を立て」とし、吉野丹生川上の句を削り、それを糊塗してある。さら

に、それにもまして重大な点は、前記二つの奉幣記事に見える社名が、原本では二つながら「丹生雨師」ではなくて「丹生川上神」または「丹生河上神」と書かれていることである。雨師は本来シナの呼称で、正しくはいま引用した文書の「末社」の部分に高竈大神と書かれているタカオカミ、および同じく鳴雷大神と示されている閼竈すなわちクラオカミをいうのであるが、丹生川上神社はミズハノメ（水の女神）を主神としたまま雨師と称されたことから案じて、この榛原の丹生神社もまた、本殿三柱の中央を占める罔象女（ミズハノメ）をもつて雨師の機能をもつ神と認めていたと解してよからう。また三柱の神のうちのイザナギは、後代に政治上の必要から迎えて祀りこんだもの、そしてニウズヒメは、本来の主神ながら、後来のミズハノメに正座を譲つていると見るべきであらう。

次に、丹生川上神社はいづごろから雨師社と呼ばれるようになったか。私が調べた限りでは、今日記録に伝わっている最初のものは大同三年（八〇八年）五月壬寅の奉幣記事で、「日本後記」巻一七・平城天皇紀に、

壬寅、奉黒馬於丹生川上雨師神、以祈雨也。

とある。もちろん記録は全部が全部後世に伝わるものではないから、この記事はほんの目安にすぎない。それにしても、文武天皇から桓武天皇に至る記録の収積としての「続日本紀」

には雨師の称呼が見出されずに、すべて丹生川上神または丹生河上神と表示されているのである。それならば、この神社に降雨を請い、あるいは霖雨を止めることを祈る風習は、続日本紀時代にすでにあらわれているとはいへ、この社を雨師と呼ぶことは、嵯峨天皇から仁明天皇にかけてシナの雨師信仰がピークにまでもりあがつてきた結果と認めてよいであらう。

雨師信仰が平安京遷都いらい多くの年月を経ない第九世紀前半に擡頭してピークに達したことはすでに前者「阿蘇明神の誕生」で論じた⁽⁹⁾。この点から、いま問題にしている榛原雨師の丹生神社を眺めてみると、その本来の社名を軽くして、なんの關係もない（後述）丹生川上神社に追隨し、自ら丹生川上雨師を誇つていたことは、その創始が他の丹生神社、すくなくとも前に紹介した菟田野町入谷のそれより後代であり、おそらく丹生氏が歴史ある水銀採鉱を放棄するか、またはそれを副業化し、彼らの主要生活を水田に求めたころの建営ではないか、と疑われる。ことに注目したいのは、この神社の鎮まる土地の名である。いかに祭神の機能が変つたにせよ、古くから社名に因んで雨師と称し、それ以前に丹生の名があつた形跡すら認められないのである。思うに、太古以来宇陀水銀の中心部に住んで活躍した丹生氏が衰えたとき、その一部の人たちは宇陀川の下流に移つて、今の雨師の土地に

抛り、本来の水銀採取を捨てたわけではないが、生活の主体をむしろ水田耕作に置いた。そのために彼らは自らの祖神の祠を雨師の社と化したのであろう。それならば当面の丹生神

四 水分神の問題

丹生・雨師に関する私の論議を理解していただくために、私は同様な事情をもつ宇陀水分神社に触れておかねばならない。一般に水分は「みくまり」とよまれ、水の配分を掌る神とされている。しかし私はこの性能を水分神の第二次的なものととし、原始のそれは分水嶺を掌る神、いいかえると国境神であつたと認める。すなわち、最初にこの神は、水流を分別する神として国境に誕生したが、後には「分」の字が配分の意味に曲解され、折柄の水田社会の発展を反映して、水利を守る神となり、水利、農耕に重要な降雨や止雨を掌ることになつた。さらにこの神は「みくまり」という名称から三転して子守の神となつた場合も見られるが、これはもちろん論外である。これらの事情は前者「阿蘇明神の誕生」に述べておいたが、ここでは二三の重要問題を論じて、私の主張を補つておく。

第一は、「みくまり」という訓は最初からのものではないとする主張である。

「古事記」の冒頭に、イザナギ・イザナミ二神が国生みに

社の創立は、宇陀川の下流域に水田が発達したところと認めねばならない。

続いて多くの神々を生んだ次第が説かれている。そのなかに天之水分神と国之水分神の誕生が見えているが、そこに「分」を訓んで久麻理（くまり）という」と注されている。この注記を鵜呑にすると、水分という神名は、最初からミクマリであり、ミクマリすなわち「水配り」であるから配水の神ということになる。いままで水分神の説明は、この考え一本で押通されてきたわけである。しかしよく考えてみるがよい。日本の神々の多くは、漢字が輸入されるより以前に生れたもので、神名の漢字による表記は後からの所為にはかならない。しかも「分」字は「配る」意味をもたない。この字は動詞としては「別」「か」「離」の意味にしか働かないのである。それならば問題の神の本来の呼び名は、水の分別・分離を意味するものであり、もともとはそうした性能をもつ神であつたと認めねばならない。その神が、後代に日本人の生活様式の発展、それに伴う国土観の変化を反映して、古事記に「分はクマリと訓む」と注されたところには、水の配分という性能に変えられていたということになるではないか。

「延喜式」の神名帳を見ると、この神に二様の表示があるのに気づくであろう。試みにそのなから河内国石川郡鎮座の建水分神社と信濃国更級郡鎮座の武水別命神社とを取上げることがよい。両社名を比較して、「建」と「武」および「分」と「別」とが、それぞれ共通に使用されていることを知るであらう。分字と別字とが同意に共用されたことは、神武天皇の吉野めぐりの話にてくる国樞(国栖)の首長イワオシワクを、記に「巖を押分けて出で来」と説明して「石押分」と綴り、紀には「磐石を披きて出づ」として「磐排別」と表示していることから首肯できよう。これには天石戸別神すなわち天石戸開神という神名も参考になるし、神代巻に続々と登場する神々の名からも、いくつかの例が求められよう。延喜式神名帳の阿波国名方郡の項に見える「天石門別八倉比売神」が一に「天石門和氣八倉比咩神」とも書かれていることから案じて、別・分の漢字はワケにあてたことがわかる。このように案じて、私は水分の二字をミズワケという神名の漢字による表示とし、分水嶺の分水と同意として、この神の本然の姿をそこに見出すのである。

第二に、水分神の祭祀は、古代大和に特有なものとして発生し、南大和中心時代つまり奈良遷都以前の遺風であると考える。

水分神社の分布は大和に断然多く、しかも奈良盆地の南辺

に集中している。とくに、祈年祭や六月・十二月の月次の「祝詞」に、

水分に坐す、皇神等の前に白さく、吉野・宇陀・都祁・葛木(葛城)と、御名は白して、云々

とあるように、吉野水分神社・宇陀水分神社・都祁水分神社・葛城水分神社の四社は、後代まで特別な待遇をうけている。四社の位置は後に詳説するように、それぞれ大和から他郷へむかう古い街道にあたっているが、いま飛鳥の地に立つて改めて四社の位置を眺めわたすと、実に重要な一事に気づくのである。それは、四社が南大和から東西南北の各方面に放射状に走る要路を、それぞれ握り、四方の境界に一つ一つ鎮まっていることである。そして、そこに浮かびあがってくるのは、大和朝廷の最初期の境域ではないか。

以上の四水分神社のほかに、式内社として河内の石川郡九座の一つに建水分神社がある。この社は太古に南大和から河内にぬける最も重要な通路となつていた水越峠をはさんで、大和側の葛木水分神社と相對しているが、おそらく最初に水越峠の上に配された水分神の祠が、麓に下つて今の御所市関屋に位置し、葛木水分神社の名を保つ一方、河内側にも勧請されて、建水分神社となつたのであらう。したがって河内の式内水分社は、大和の支流とみなされよう。別に延喜式の神名帳には、近江国の伊香郡と高嶋郡とにそれぞれ大水別神

社が記録されている。これらが水分神の祠であることは前の論文で紹介した。なお二三を気づくままに補えば、式内社として信濃国更級郡十一座のうちに武水別命神社、¹⁶撰津国住吉郡廿二座の一つに天水分豊浦命神社がある。また「三代実録」上、清和天皇貞観元年三月二十六日の条によれば、安芸国の水分天神社が従五位下に叙せられている。これらは、水分の神が大和朝廷の勢力とともに地方に運ばれたか、ないしは地方に水田農耕が発達したために勧請されたものと見なされよう。

このように私は水分神の原義を国境神とするのであるが、別に昔からこれに類似の機能をもち、とくに要路を守るものとして山口神社があつた。延喜式神名帳にはそれが一々報告されているが、「三代実録」には、大坂山口神・膽駒(いこま)山口神・養父(やぎふ)山口神・都祁山口神・長谷山口神・忍坂山口神・吉野山口神などを列挙した一条が見出される¹⁷。それにも拘わらず「祝詞」には、

山口に坐す、皇神等の前に白さく、飛鳥・石寸(いわれ)・忍坂・長谷・畝火・耳無と御名は白して、云々とあつて、列挙してある六社の山口神はすべて南大和に限られているのではないか。このことは、祝詞がその性質上、平城京以前の慣習をそのまま伝えていると考えてよい。したがって四社の水分神社を特祭するのも飛鳥中心時代の遺習であ

り、往時に大和朝廷が四方四隅に配して、それぞれ他郷への境上を守る神としたのが水分神にほかならないといえるであろう。

第三に、「水分造り」といわれる三社一連ないし三社一殿の特異な建築様式を参考しよう。神のために社殿を営むことは後代の所産であつて、はじめは磐坐(いわくら)式のシンボルを祀るにすぎなかつたことは、いうまでもあるまい。しかし、磐石にせよ社屋にせよ、祭神を三つ数えて一社とする形に、私は興味を感じる。

例えば現在の都祁水分神社の祭神にも、それが伝わっている。この社の祭神は天水分神・国水分神と都祁水分神の三柱である¹⁸。天水分神は日本全体の分水という現象を支配する神、というよりも、むしろ「分水」という現象の神格化である。したがつてどの水分神社にも共通するいわばオールマイティであるが、国水分神の「国」は大和国を意味し、最後の水分神は郷土のものと見るべきであろう。だから、おそらくこの神祠が山上にあつたころは、磐石が三個置かれて、中央のものはオールマイティの天水分神、そして左右のものは、一は大和の水分神、他は峠のかなたの地方の水分神の宿るものとされていたのであろう。なお宇陀水分神社では、天水分神・国水分神と速秋津彦神の三柱を祭っている。第三の速秋津彦神は、古事記に天水分神と国水分神の父神とされ、水戸

の神と伝えられているが、おそらく水分の意味が後代の人たちの生活に都合がよいように変えられて、「水配り」となつたときに、水神の祖として祀りこまれて、宇陀水分の神となつて代つたのであらう。「みくまり」という訓がこのような変遷の結果生れたことは、いうまでもない。

第四に、水分神社が、山上から山麓の平野部に移動している点に注意しよう。

水分神社の原始形態は、古代の要路が峠を越える境上に据えられた三体の磐石であつたと推定されるから、社殿が営まれるようになったころには、すでに峠の上から「山の口」の部分に移されたやうで、都祁水分神社と都祁山口神社とが、むかし同一境内に鎮まっていたのも、それを示してはいないか。都祁山口神社は、奈良県山辺郡都祁村の小山戸にあり、いわゆる都祁の山々を背にして、その山裾を占めているが、その参道の登り口の傍らには「水分社上宮」と刻まれた石燈籠が残されている。⁽¹⁹⁾そしてこの神社の奥山には水分神降臨の磐坐と伝えられる巨石があるという。石そのものの真偽性はともかくとして、このような伝えは、咲谷川（西南流、初瀬川の一支）・笠間川（東南流、宇陀川の一支）・向川（北流、深江川の上流）を分水する山地が、むかしの水分峯であること⁽²⁰⁾を仄かす。おそらく水分神は、都祁野における生活の進展によつて、この峯から麓の山口神社の境内にまで移されたと見

られよう。しかもこの神は、さらにもういちど移転して現社地に鎮まつたのである。それは、山口神社の側を流れる向川の流れに沿つて約三キロ北方にある同村字友田の坂窪山麓であつて、向川の谷もここまで来るとやや広まつて水田を敷きつめ、その水田を見はるかす小高い丘の上に現社殿が営まれている。

さらに現在の吉野水分神社について考察しても、同様な推移の跡をたどることができる。現社殿は、花に名高い吉野山の奥にあり、吉野山の尾根すじ町から南に大峯へと登つていく道が、中の千本をすぎて迎える子守部落に、この部落の家なみを見おろして立つている。三社一棟のみごとな水分造りであるが、この神社の奥には水分峯すなわち万葉集に伝わる「みよしのの水分山」が指摘される。⁽²¹⁾「続日本紀」に「芳野水分峯神」と見えているのは、そのような山名があつた証拠である。一方、吉野山の麓の上市の丹治という部落には、吉野川左岸の河原に臨む山腹に水分神社が現存し、かつ河原の部落を水分（すいぶん）と称している。⁽²²⁾「大和志料」その他に、水分神社が近世にいちど吉野川の河原の丹治に下つたが、洪水のために流失した、と伝えられているほどであるから、現社地が昔のそれであるかどうかは疑問であるが、とにかく水分神祭祀はこのように吉野山下にも保存されているのである。したがつて吉野水分神もまた、山上から山腹へ、山

腹から山麓の河原へと三転した経歴をもち、現社殿は中間の山腹の子守の地に留められていると考えられよう。

伴信友は、万葉集の三芳野の水分山に「ミヅワケ山とも訓をつけたるは、この神（水分神）の御名をだに知らざるひがごとなり」と憤慨しているが、この山名が万葉仮名で伝わらなかった以上、同氏の糾弾は成立しない。水分神の呼び名は、神の働きの変遷によつて変つていくとする私の論からすれば、万葉集時代のそれは、むしろ原義のままミヅワケと訓まれて

五 宇陀の水分神社

問題を宇陀の水分神社にしぼつてみると、この神社にもまた三転ないし四転した形跡が認められる。現在、宇陀郡内には水分神社と呼ばれるものが七社ある。「宇陀郡史料」によつて列挙すれば、

- ①榛原町下井足（旧県社） ②宇太村古市場（現菟田野町、旧郷社） ③宇賀志村上芳野（現菟田野町） ④神戸村迫間（現大宇陀町） ⑤神戸村平尾（現大宇陀町） ⑥宇太村見田（現菟田野町） ⑦室生村下田口

である。このうち④・⑤の両社は③の分祀、⑥・⑦は②の分祀といわれるから、古来重きをなしたのは①・②・③の三社で、現地では①の下井足のを下社（下宮）、②の古市場のものを上社（上宮）、そして③の上芳野のものを総社と呼んで

いたにちがいない。また同氏は丹治村（字水分）にある水分神社を頭から否定しているが、これは水分社の変遷や発展を全然考慮しない点に基いた速断にすぎない。神社のなかには人間生活の推移や住地の変更に基づく人間の都合によつて、社地を変転したものが多い。祭神の性能もまた一定不変のものではなくて、同様の事情から人間の御都合主義による変化をうけた場合が珍らしくない。我々が神社を史料として使いうるのは、まずこの点に求められるのではなからうか。

いる。

この三社は、長い間おのおの自社をもつて式内社としての宇陀水分神社であると主張しつづけていたし、また明治の社格決定にさいしては、下社（下井足）が県社、上社（古市場）が郷社とされ、甚だしい格差がつけられたのである。しかし、式内社の待遇や明治の格づけは、必ずしもその社の歴史的価値を表示しない（後述）。それよりも私が注目したいのは、三つの宇陀水分神社の相互の関連にはかならない。これについては、古市場の上社に保存されている写本の「由来記」と、同じくこの水分神社の式能として伝わってきた謡曲「水分」が参考になるが、ともに江戸時代のものらしい。とくに前者には永禄三年九月の日付があるが、原本でないのは甚だ遺

憾であり、謡曲「水分」の方がむしろ古いように見うけられる。そのうえこの二つの文書に示されている水分神社の縁起には、宇陀における三社の本末問題がからんで古市場の上社の地位を必要以上に強調してあるから、その点を警戒しつつ、両資料から読みとれるあらすじを紹介してみよう。

まず宇陀水分神は高見山の山頂の磐石に降臨したとされている。そのために高見山は「一に高水分（たかみくまり）山」とも呼ばれ、この山名が略化して現名になったという説もある。この山は、その南肩を越える道がメディアン・ラインの上を行く伊勢・吉野間の重要な交通線として知られているが、同時にこの山は伊勢と宇陀との国境でもあり、その西北麓に位する平野部落はもと宇陀に所属した。芳野川の上流にある上芳野から谷尻・平野を経る道は、現在でも高見山登高の最捷路となつてゐる。

次に宇陀水分神は、高見山頂の磐坐から中山の地に下り、そこから玉岡に、さらに「流れに添ふて」すなわち芳野川沿いに田山へと移つたという。中山とは上芳野（総社）の社地を、玉岡は古市場（上宮）のそれを、そして田山は下井足（下宮）のそれを、それぞれ指称したものである。この三社が上記の①②③に相当することはいうまでもないが、三社は宇陀水分神が、伊勢への国境の原地点（磐坐）から漸次に芳野川の谷に足をのばしていった結果とされ、三社は芳野川の

流れに沿つて一線を画くのである。古市場水分社所蔵の「御在所記」（写本）に、

一者高水分山、二者芳野中山、三者玉岳（玉岡）上宮、四者田山下宮。

とあるのは、こうした宇陀水分神のエキスパンションの順序を示すと見なされよう。とくに古市場のものを上宮、下井足のものを下宮と呼んで上下を区別すること、また古市場水分社の例大祭（十月二十一日）には芳野水分社から神輿を迎える儀式があること、さらに謡曲「水分」ではシテの老翁が古市場（玉岡）の水分神、ツレの老婆が芳野（中山）の水分神であり、夫婦として関係づけられていること、なども参考されてよからう。

「三代実録」の清和天皇紀や「延喜式」の神名帳を調べてみると、水分神社はたいてい山口神社を伴っているのに、宇陀（宇太）山口神社という社名はどこにも見出せない。しかし、現在古市場の水分神社と芳野川をへだてて約一キロ西方に守道（もち）という部落があり、その南一キロには山口という地名が残っていることから、古市場の水分社は宇陀から伊勢への往来において山口の立場にあつたのではないかと推測される。

いうまでもなく、大和の国中（くになか）から伊勢への古道は、今の桜井の東の宇陀辻から忍坂（忍坂山口神社あり）

半阪（神武天皇紀の男坂）西山（伝説上のイワレ）松山（大宇陀町の中心）を経て古市場に通じていた。この道の北方に展開している宇陀川および芳野川の下流域は、古くは湿地帯であつたにちがいない。この一帯は、つまり古代語で湿地や沼沢地を意味するムタであり、古道はこのムタ地帯の南側をたどつていたらしく、宇陀という名称はムタの訛りではないかと疑われる。ところがこの湿地帯は、古代人が或程度の治水技術をわきまえ、水田経営に集中するようになるにつれて、しだいに耕地化され、そうした農耕生活の発展に伴つて水分神の原義が見失われて、これを水神と解するようになって

六 式内社への疑惑

私は水分神社の正体を訊ねるのに意外に多くの筆を運ばねばならなかつたが、結局この神社の変遷が人の世の経済生活の在り方のうつりかわりと密接に関連していることがわかつた。水分の神は、国境神としての原義を失つていく一方、人間の生活が水田本位に移りゆくのにつれて、水の神と解釈され、水田地帯へとしだいに引きよせられていつた。この経過はそのまま丹生神社の推移にもあてはまるようであるが、私はそれをもつとはつきり擱んで、宇陀郡における二つの丹生神社の歴史的な価値を見きわめる必要を感じる。しかしこれには、まず式内社の問題がからんでくる。

た。宇陀・芳野の両川が合流する榛原町下井足に鎮まる水分神社（下宮）は、このような推移の結果、古市場（上宮）から分祀されたものにはかならない。古市場の水分神社が、その三柱の神の一つを速秋津彦に変更したのも、同じ理由による。謡曲「水分」にこの神を「五穀成就の御為に、下界に雨をふらし、又は雲を晴し、或る時は湖水をさけ、御田代を給ふにより、みくまりの神とは申すなり」と説明してあるが、これこそ後代の人々が水分神に勝手に負わせた機能にすぎない。

「延喜式」神名帳の大和国宇陀郡十七座のうちに「丹生神社 歟」と示されているのがそれで、この神社は小社ながら祈年の幣に歟ととが添えられる待遇をうけていた。それならば、この式内丹生神社は、菟田野町入谷のものと同榛原町雨師のそれとの、いづれに当てられるか。この問題は昔からかなり論議が多く、考証者を迷わせたらしい。論者はたいてい雨師説をとつているのに、「神名帳考証」の神祇全書本では「丹生村の土神」と注され、また同じく伴信友本にも「今の丹生村」とし「一説に雨師村に在り」とことわつてあるのに注目される。むろんこの注が加えられたころ、丹生村と

いえば菟田野町の入谷（旧称丹生谷）であり、兩師村の名がすくなくとも足利時代にまで遡ることは、すでに紹介した。「奈良県宇陀郡史料」の編者が「丹生村は兩師地方の古名か、未だ勘へず」と附記したのは、入谷の丹生神社を失念しているのである。

さきほど考証しておいたように、菟田野町入谷は太古の「宇陀の真緒」の本場であり、したがって往古の丹生であることは、ほとんど確実である。だからこの地の丹生神社こそは、神名帳考証にいう丹生村の土神にほかならず、式内社として最も正統であり、最も適格な神社としなければならない。それにも拘わらず、明治政府のもとにおいて、入谷の丹生神社は無格社として放置され、兩師の丹生神社は指定村社として待遇された。これは当時の考証官が延喜式の丹生神社を兩師のそれと認めたからである。

しかし私は思う。延喜式に表明されている官社の選定について、いままでほとんどの学者が頭からそれを信じこんで、神社の古さや価値の基準にする態度をとっているが、これは戒心を要する。周知のように延喜式は、藤原忠平らが醍醐天皇の勅をうけて延喜五年に編集をはじめ、延長五年（九二七年）十一月に完了したものである。官社の撰定はこのとき一行われたものではないが、試みにこの当時を白鳳・飛鳥の時代と比べてみるがよい。日本人の生活の在り方自体が大

きく変化し、かつ進展している。それにつれて神社に対する評価も当然変つたし、祭神のすべかえさえ見られたのである。さきに触れた貞観時代を目安とする平安朝前期における兩師信仰の隆運は、その一端にほかならない。それならば藤原町の丹生神社が兩師として延喜式に記録せられたことは、首肯できるが、反対に、太古代において重要な意義をもつていた神社で、その後の諸事情から機能を変え、あるいは衰頽し没落したものについて、どれだけ考慮が加えられたか、私は疑いなきをえない。

要するに延喜式や明治の社格などに表われている神社の格づけは、過去においてその神社がいかなる役割を果したか、という点よりも、むしろその格づけが行われた当時において、その神社がいかなる役割を演ずるかに規準が置かれた。だから社格は、それによつて格づけ当時の政情なり世態なりを推すことはできても、過去を追求する歴史的作業には、たいして重きをおきたいのである。私が、宇陀郡に残っている二つの丹生神社を同格にして取扱つたのは、このような理由による。

もちろん兩社は、科学的に調べた結果、ともに水銀地帯の上に立つているから、充分に存在理由をもっている。しかし入谷は奥地にあつて谷せまく、これに反して兩師は宇陀・芳野兩川の合流点を中心に展がる広い谷の一角に位する。さき

ほど往古の湿地帯と推考したこの川尻の野が、水田化されていくにつれて、奥地からこの部分に人口が移動したことは認めねばならない。そのうえ入谷の丹生社は、ニウズヒメ祭祀のままで世人の記憶から去つていつたのに、一方の雨師の丹生社はニウズヒメを片隅に追いやつて、ミズハノメ（水神）に正座を与え、さらにこの水の女神を雨師と化して当時の世態と歩調をあわせているのである。ことにおもしろいのは、

さきほど紹介したこの社の社記によれば、弥宜や神主としてそのころこの社に奉仕していたのは大神（おおみわ）氏であつた。しかも大神の名は、奥地入谷の隣接部落の名として今日まで残っている。そして菟田野町に属するこの大神部落には、大神神社すなわち桜井の大三輪神社の奥の宮と称せられる小祠が伝わっている。このことは、単に本社と奥宮との関係だけでなく、大神氏の移動にも関連をもつようである。すなわち、菟田野町入谷に丹生神社を建てた丹生氏は、そのの

七 磐余彦伝説

このように榛原町鎮座の丹生神社は、水銀の女神の祠として営まれながらも、水の女神をも迎え入れ、やがて後來のミズハノメに正座を与え、これに雨師の性格を加えて時代の流れに乗り、かつ政府の意を承けてイザナミの女神をも受入れている。そればかりでなく、この社は吉野の丹生川上神社と本

ち祭神ニウズヒメが表示する朱砂の採取の延びなやみ、ないし衰運に遇い、しだいに水田農耕への転向を強めたが、その一部は宇陀川の河尻に移つて生活の主体を水田に求めはじめた。このとき丹生氏と関連して大神氏の一部も移り住み、雨師に営まれた丹生神社に奉仕するようになり、その伝統が長く続いていたのではあるまいか。

この問題については、なお大倭神社と丹生神社との関係をも考慮しなければならないので、他日に譲るが、最後に、宇陀郡に見出される二つの丹生神社について、それぞれの歴史的意義を要約する。端的にいって、菟田野町入谷のものは、古代の宇陀水銀を記念する正しい意味での丹生神社であり、榛原町雨師のものは、後代に雨師信仰の流行に便乗して格上げされたものである。両丹生神社とともに丹生氏の営んだものとはいえ、その間に大きな時代差があり、丹生神社の本来の形においては、入谷のものを採らねばならない。

家争いまでしている。しかしこの争いは、けつして理由なく行われてはいない。それは、丹生神社に後來の祭神として受入れられたミズハノメの縁故だけではない。この争いを裏付けた神武天皇伝説には、宇陀地方が重視されている傾向が実に強いからである。それゆえに、私はこの点を次に検討して

みる必要に迫られる。

記紀の神武天皇紀が、終始一貫して同一人物の行動を述べたものであるか、いなかについては、いま論議をしない。しかしこの二つの古典を比較検討してみると、神武天皇伝説の構成がきわめてモザイク的であり、結局それは、いくつもの異った伝説の集成ではないかという疑惑が生れる。以下当面の問題に必要な部分に触れてみよう。

神武天皇伝説の正体をつかむのに、第一のキーポイントとなるのは天皇の吉野巡幸の話である、と私は思う。古事記と日本書紀が、天皇巡幸の道順をちがつて伝えているだけでなく、その話自体をそれぞれ所を異にして収めているからである。記紀に即いて、簡単に説明してみよう。

問題の一節は、天皇が阿陀の鵜養部の祖（賢持の子、紀は苞苴担に作る）、吉野首部の祖（井氷鹿、紀の井光）、吉野国巢部の祖（石押分の子、紀は磐排別に作る）の三人の「国つ神」すなわち天皇族に属さない地方的な族長に遇い、彼らを帰服させた顛末を述べたものであるが、その順序は記紀それぞれに異っている。記はここに配列したように、阿陀族を最初にあげているのに、紀ではこれを最後に置いている。

のみならず、この吉野系諸族の帰順を、古事記は天皇が熊野から宇陀に至る間のつなぎに使い、「其の八咫鳥の後より幸行まししかば、吉野河の河尻に到りましし時に」としてこ

の話を述べ、国巢から「踏穿越えて、宇陀に幸でましき、故、宇陀之穿とぞいう」と結んである。これに反して日本書紀は、天皇が宇陀の宇迦斯（ウカシ）族を征服した後に繋けて「是の後に、天皇は吉野の地をみそなわしめんと欲して、乃ち菟田の穿（宇迦斯）邑より、親ら輕兵を率いて巡幸ます」と述べたうえで問題の話に及んでいる。

このような記紀の間のちがいは、紀が記の記事配列を改め正したためとは受取れない。むしろ吉野諸族の帰順を述べた話が単独に伝わっていたのを、古事記は神武天皇の熊野における話と宇陀における話とを結びつけるために利用し、別に日本書紀は、天皇が宇陀の宇迦斯（猾・穿）族の地に根拠を据えたことに重要な意義をもたせるために使用したと考えねばならない。このように材料として使う場所がちがつたことが、阿陀族帰順の叙述を話の初めにしたり、あるいは話の最後に配したりした原因であろう。

そう見ると、吉野三族の叙述からは、帰順の順序が消えてしまう。そこで、さらにもう一步たち入ってみると、問題の話は、大和朝廷の南方の山間部に居た異族の存在とそれぞれの生活を、神武天皇の巡幸にかこつけて、伝説風に語り伝えたもので、いわば最古代の吉野風土記にはかならない。しかも、このような性質をもつ話が、このように使われていることと自体が、天皇一代の伝記構成のナゾを解くものではなから

うか。そのうえ、たとえ単なる伝説ではあつても、神武天皇が吉野・熊野の山中に進軍の途をとつたことは、きわめて理由が薄弱となる。この点では、むしろ天皇が熊野から進発して「吉野河の河尻」に到つたと書かれていることが、新らしく判断のタネになるであらう。ことに、吉野川（紀川）の河尻にあたる現在の和歌山市に、古代史上重大な意義をもつ日像鏡・日矛鏡を祀つた日前・国懸神宮が鎮座する事実もそれを助けて、古代の大和と熊野の往来には吉野川の河筋が利用されたという推測も可能となるではないか。

次に、神武天皇紀の分析にとつて、注意しなければならぬのは、丹生川上の神事である。この話は日本書紀に見え、神武天皇が国見岳の八十梟師（ヤソタケル）や磐余（イワレ）邑に拠る磯城族を征するため、丹生川上において天神地祇を祭り、かつ川魚を瀕死の状態で浮かびあがらせた咒（カジリ）によつて軍隊の士気を鼓舞したとして、その次第を詳しく伝えてある。ところが、この話は古事記には全然欠けているが、それはなぜだろうか。古事記が編述されるさいに、この神事が閑却された結果だとは思われない。むしろ私は、日本書紀が神武天皇の建国の前提として宇陀のウカシを重視し、そのためにそこに伝わっていた話を、別に採択したためであると考ええる。これについては後に詳述しよう。

私は神武天皇紀を以上の二点から眺めたが、それだけでも

記紀の間に神武天皇を叙述するのに重点の置き方がちがうこと、また建国までの天皇の進軍過程が、吉野巡幸の話をはさんで前後二つの部分にキツパリと分別されてしまうことがわかつた。神武天皇紀が、いくつかの話を集め、それらを一人の人物に結んでまとめあげられたものではないか、という疑いはまことに濃厚である。いま、日向から熊野までの東征話には、ことさらに触れないが、その後の部分を日本書紀に求めてみて、①菟田（宇陀）のウカシ征服と血原の伝説、②吉野巡幸、③丹生川上の神事、④ウカシからの進軍の四つの段落を見出すことができる。しかもこのすくなくとも四つに分れた話のそれぞれが、すべてウカシに関連づけられていることは、大いに注目に値するであらう。

神武天皇紀が、熊野までの東征部分と大和における行動の部分とに、すくなくとも二大別されることは、この天皇が多くの名をもつことと関連なしとはいえないようである。

いうまでもなくこの天皇の名は神日本磐余彦すなわち記の神倭伊波礼毗古である。ところが「古事記」は、上巻の末文でカムヤマトイワレヒコのほかにはワカミケヌ（若御毛沼）およびトヨミケヌ（豊御毛沼）の二通りの異名を挙げ、「日本書紀」巻三・神武天皇紀の冒頭には「神日本磐余彦天皇、諱は彦火々出見」という疑惑に富んだ紹介がある。さらにこの書の巻一・神代紀の末節に、多くの異説を並記した特色ある

簡条があり、それには、この天皇を狹野尊とする説、磐余彦尊とする説、あるいは磐余彦火々出見尊とか神日本磐余彦火々出見尊と綴る説が示されている。いまここに見えている磐余彦火々出見という表現を、磐余彦と彦火々出見尊との結合された形と解するならば、日本書紀の「諱は彦火々出見」の一句についての疑いは簡単に氷解してしまふ。しかし従来はそうすることができなかったほど、イワレヒコとヒコホホデミの二つの呼び名は同格を主張するに充分な力をもっていたのである。

磐余（イワレ）とは、一般に今の桜井市あたりの古地名とされている。日本書紀によれば、ここはもと片居または片立といわれたが、神武天皇がこの地に拠つていた磯城（シキ）族を征服した結果、磐余邑と称するようになったという。このように磐余彦のイワレは、兄猾（兄宇迦斯）・弟猾（弟宇迦斯）、兄磯城（兄師木）・弟磯城（弟師木）、あるいは長髓彦の別名とされている登美彦などと同様に地名と結びつくもので、その土地に拠つていた族名であり地名であつたと考えなければならぬ。したがつて、もし前記の日本書紀の所伝に誤りがないならば、神武天皇の名となつたイワレは、今の桜井市以外の地点に求めねばならないはずである。そうなる

と、宇陀郡の郷土史に、現在の大字陀町の中心部落である松山の西隣に西山（旧神戸村字西山）という土地があり、そこにイワレの名が残つているとされ、これを神武天皇に結びつけてあるのも、あながち謬説とはいへなくなる。まして、このような大和の地名に因む名を、九州での物語にまで用いることは、それこそ無謀そのものではないか。

思うに、記紀の記述は、九州出身の彦火々出見尊の物語と大和における磐余彦の物語とを、八咫鳥という道案内の名人の話で結びつけたものであらう。しかも八咫鳥は、現在も宇陀郡榛原町（旧伊那佐村）の高塚に鎮まる式内社の八咫鳥神社に記念されているように、宇陀にいた地理に明るい一族であつたと推測されるが、二つの物語の結合に使われている八咫鳥の道案内もまた宇陀の伝説であるのに注意したい。おそらく大和朝廷は、帰順した熊野族との関係をも始祖の経略の形で考えて、このような話をつくり、八咫鳥にもうひとつの役割を演じさせたのであらう。後代に平安貴族の間に熊野信仰が流行したときに、この話は一段と強められて熊野に伝わり、そこにも八咫鳥を記念する祠が建てられ、それが現在もお熊野川の河口に位する新宮市の一小字の名として残つたのではあるまいか。

八 丹生川上の神事

宇陀水銀をめぐる古代史上の諸問題 松田

日本書紀の神武天皇紀が、宇陀地方、とくにウカシ（宇迦斯・今の宇賀志）を中心とするイワレヒコの行動、および彼のそこからシキ（磯城・今の桜井市域）への進出を、きわめて重く取扱ひ、それを建国の前提としたことは、ほとんど疑いをいれない。それゆえにイワレ出身の一英雄が、ウカシを征服してそこを基地化し、ついでシキに攻め入つて大成果をあげる話こそは、神武天皇紀の主体と見るべきであらう。それならば、イワレヒコがシキへむかつて軍を起す直前の話として、彼の宇陀における動きのなかに組みこまれている丹生川上のカジリの話は、どう解すべきであらうか。

いままでの学者が、丹生川上でイワレヒコがカジリを行つた舞台を、吉野に求めているのは、日本書紀の記事配列やその記述ぶりからすると、まづたく無拠といわなければならぬ。おそらく彼らは、たまたま丹生川上神社が吉野の地に所在する点から、それに迷わされて日本書紀を曲解したにすぎない。この話が古事記に載せられていないことは、すでに報告したが、古事記に見えない以上は、我々は日本書紀の示すところに従つて解釈するのが当然ではないか。

問題の一節に見えている二三の地名をとりあげて考えてみても、いうところの丹生川上は、吉野とはなんの關係もないし、またイワレヒコが吉野を舞台としたと主張するには、あまりにも不都合である。例えば天の香久山である。これは記

紀の天照大神の岩戸隠れの一条に「天香山の真坂木」を掘りとつたことが伝えられているように、伝説的な臭いが強いが、むしろ岩戸隠れの話のなかに、南大和中心時代にあまりにも有名であつた山が顔を出したと解して差支えないであらう。イワレヒコの神事の場合は、「万葉集」の開卷第二首目に収めてある舒明天皇の歌に、天皇が国見をしたとある天の香具山、また「延喜式」にいう天香山坐櫛真命神社、すなわち占卜の神クシマチを祀つた式内社の鎮座した天香山と同じ山で、現在も桜井市の西南に存在する同名の山と見られる。この山は、神意を伺う占卜と深く関連するほかに、もうひとつ注意されてよいことがある。それは陶土の問題にほかならない。

大和三山の一つとしてあまりにも名高いこの山は、地質上からすると畛傍・耳成の二山とちがい、また飛鳥地方とも異なる特殊なもので、山体の南半分が斑瀾岩（飛白岩・Gabro）の噴出によつて造られている。私の調査は、その表土にだいたい〇・〇〇〇—１％の水銀が含まれていることを明かにしたから、白陶土（カオリン）の形成が充分に考慮できる条件をもつ。それならば、イワレヒコが丹生川上で天地の神を祭る準備として、八十平盆（やそひらか）や八十枚の天の手扶（たぐじり）、また蔵盆（いっぺ）などを作る素材をこの山に採らせたという話は、天香久山が神事用の陶土器の素材とさ

れた粘土の産出ですぐれ、かつ有名であつた事実が反映して
いると考えられるではないか。

さらに我々の目をひくのは、イワレヒコの基地からこの山
に至る距離の遠近や道すじである。例えば、天香久山の粘土
を採るために、シイネツヒコ（椎根津彦）とオトウカシとを
老翁と老婆に変装させ、敵中を潜行させたという話は、吉野
を基地としては距離感が狂つてしまう。また丹生川上での神
事の後に、イワレヒコがシキに向つて進軍するの、今日の
大宇陀町の中心部（松山）あたりを経て半坂・忍坂をたどつ
ていく中央道（男坂）、また南の山中を進んで宮奥針道を経由
する南道（女坂）、および北方の榛原町域に属する西峠をこえ
る北道（墨坂）の三道が候補にのぼつてゐる。宇陀川尻のム
タ地帯を避けるこの三道が教えてくれる行軍の起点は、推定
にかたくないであらう。もちろんこれらは伝説である。とは
いえ当時のイワレヒコの駐留した土地を、奥宇陀の丘陵部、
はつきりいつて旧宇賀志村（現菟田野町の北半分）の地域で
あつたと見て、誤りはないであらう。

こういう理由から私は、イワレヒコが菟田（宇陀）の高倉
山に登つて、ヤソタケルやエシキの情勢を觀望して、いよいよ
進軍の腹を決めて天神地祇を祭り、またイツベを丹生川に

九 丹生神社と丹生川上神社

宇陀水銀をめぐる古代史上の諸問題

松田

沈めて奇瑞を示したという、そのカジリが行われた土地を、
宇賀志の地域内に求めるのである。しかも、宇賀志だけに限
らず、広く宇陀一帯を考慮しても、太古に丹生川という名称
があつたものといへば、前記の菟田野町（旧宇賀志村）の入
谷すなわち丹生谷を流れる川以外には求められないではない
か。いまにまで丹生神社を守りつづけてきた入谷は、神武天
皇伝説がまとまつたところ、というよりもむしろイワレヒコの
英雄話が生れたころ、丹生とよばれる朱産地で、丹生族の一
派がそこに住みつき、そこを流れる川が丹生川と呼ばれてい
たと認められるのである。つまり、有名な丹生川上の神事や
カジリの話もまた、宇陀の伝説だつたのである。

なお、榛原町雨師に鎮座する丹生神社では、丹生川上神社
の本地をもつて自任したためか、同じ伝説のなかに見える
「菟田川の朝原」をもつてその社地に宛て、現在でもその社
前に標石柱を立てて、それを誇つてゐる。しかし丹生川上と
菟田川の朝原との混同は許されない。同情的に文意を求めて
も、丹生川上は神事のために特に選ばれた地点であるのに、
菟田川の朝原はイワレヒコが日常に神事を行つていた地点に
すぎないからである。

神武天皇の丹生川上のカジリを記念して営まれた社が、丹生川上神社である。このことは、いまさら説明を要しないが、この神社について解決すべき問題は、あまりにも多く、またあまりにも重大である。私は昭和三十三年に「丹生考」を書いて、この神社についての考えを発表していろいろ、折あるごとにそれを補っているが、その間に私の考えに賛成する人が多くなる一方、なかには自家の説としてそっくり祖述する人まで現われてしまった。祖述の動機はどうあろうとも、私は私なりに責任を感じていたが、いま宇陀の問題に当面したこの機会に、前考に思いついた修正を施しておきたい。

室町時代末期に卜部兼俱が撰したと推考されている「⁽²¹⁾二社註式」には、丹生神社を紹介して、

丹生社〔注〕号雨師社。延喜神祇式云、大和国吉野郡丹生川上神社。

と筆が起されている。しかしこの一節の全部は、丹生神社の説明ではなくて、丹生川上神社のそれである。次に同書は祭神に言及して、

水神・罔象女神〔注〕伊弉册尊化生也、或云閼竈。

とあるが、これも丹生神社のそれではなくて、丹生川上神社の祭神の紹介にすぎない。神武天皇の奇瑞が丹生川で行われたから、川の流れを支配する水の女神の罔象女（ミズハノメ）をもつてそれを記念したものである。また閼竈（クラオカミ）

は、これこそシナ的な雨師そのものであつて、水ということからミズハノメに雨神の機能が附加されただけでなく、雨師がつきまとい、あるいは併祀されたことを明かにする。さらに同書は、この記事につづけて、

人皇四十代天武天皇白鳳四年乙亥御垂跡。

と報告しているが、これまた丹生神社の記事ではなくて、丹生川上神社の創建年次を伝承したものにかならない。おそらく丹生川上神社の古い社記によつたものと考えられる。このように、室町時代ですら、丹生神社と丹生川上神社とは完全に混同されてしまつていて、丹生神社を正しく伝えている記録は皆無であつたらしい。我々は幸にもそれを補うものとして、紀伊に高野山真言宗によるニウズヒメ護持の事実をあげることができるが、とにかく丹生神社は早くから丹生川上神社のカゲにかくされてしまつたのである。

前節で論じたように、神武天皇のカジリを伝えた日本書紀の一節を正しく解釈すると、その舞台となつた丹生川上は、宇陀郡菟田野町の入谷でなければならぬ。それにも拘わらずこの神事を記念する丹生川上神社は「延喜式」神名帳に吉野郡の十座の一つに数えられて、名神大社に列せられているように、吉野郡内に営まれたのである。つまり我々は、宇陀の伝説が吉野で顕彰されるという、いとも奇怪な事実に遭遇したわけである。このひどい矛盾を解決してくれるのが、丹

生川上神社の創建を天武天皇白鳳四年乙亥の年（六七五年）とする伝えにはかならない。

いいかえるならば、この問題の解決は、天武天皇がなぜ吉野に神武天皇の行事を顕彰する神社を営まねばならなかったか、この事情に求められる。そのためには、天武天皇と吉野との深い関係を想起する必要がある。西紀六七一年十二月二日に天智天皇が崩ずると、大友皇子（弘文天皇）が即位し、皇太弟の大海人皇子（天武天皇）は吉野に奔る。いわゆる壬申の乱である。この乱は結局は吉野を地盤とした天武天皇の勝利となつて、六七三年二月二十七日に即位する。この年が白鳳元年であり、その四年に問題の丹生川上神社が創建せられたことになる。天武天皇は吉野族の地盤とその経済力を背景として近江勢力（弘文天皇）に対抗し、ついに皇位を勝ちとつたのであるから、即位とともに、改めて吉野族と大和朝廷との関連を強調する必要があるにちがいない。そこに、神武天皇が建国にあつて吉野族と深い交渉をもち、彼らに依存することが多かつたという吉野側の主張やそれに関する伝承が大幅にとりあげられたのであろう。このとき神武天皇が建国の直前に、天地を祭り、カジリを行つたと伝えられる丹生川が、吉野の丹生川に比擬された、と私は考える。

丹生川という河名は丹生という地名から起り、そして丹生は丹生族の住地に因む。もちろん丹生は、元来丹（に）の生

れるところを意味し、朱砂の産地を指す。しかし、とくに注意しなければならぬのは、このような漢字による地名表記は、和名に漢字を当てた結果だということである。つまり、丹を「に」と訓んだのではなくて、日本語が表示する「に」がシナの「丹」字が示す朱砂の赤さと比較されて、意味の上から使用された文字にすぎない。だからニウという和名に対して、丹生という漢字を使用したのは特例であつて、一般に朱砂の産地がどこでも「丹生」と表記されたわけではない。そこに私は朱砂の採掘すなわち古代水銀鉱業に従事した特殊な氏族、すなわち丹生氏をとりあげ、したがつて丹生という地名のあるところは丹生氏の住地に撰ばれた朱砂産地であり、この氏が祖神と仰いだニウズヒメを祀る丹生神社が営まれたところと見るのである。だから、丹生氏が占住しなかつたところでも、ニウと呼ばれていた朱砂の産地は、存在したはずである。現在残っている地名のうち、丹生と同音の異字と認められる仁宇・荷尾・仁保・仁歩・丹布・邇保・女布・壬生などがそれであると考えてよからう。ただし、このテーマについては別の論考「丹生の異字に関する賞書」（早大文学研究科紀要・一〇、昭和三九年）に譲る。

ところで吉野郡内での丹生神社といえ、現在では次の四社を挙げることができる。

①吉野郡西吉野村（旧賀名生村）大日川（おびかわ）鎮

座の丹生神社。

③吉野郡下市町（旧丹生村）長谷（ながたに）鎮座の丹生川上神社下社（旧称は丹生明神）。

③吉野郡吉野町六田（むだ）鎮座の丹生神社。

④吉野郡東吉野村（旧小川村）小（おむら）鎮座の丹生神社（丹生川上神社中社の摂社）。

この四社の所在地のどれもが、古代における朱砂産地として適格であることは、私の現地調査、および私が大和水銀鉱業所の技術的援助をうけて採取した試料の微量分析によつて確認されたが、このこともすでに公表済みである。

さらに私は、奈良県の西に隣接する和歌山県北部一帯にわたつて丹生および丹生神社の痕跡を実地に即いて搜つてみたが、その一成果として、丹生氏が祖神としたニウズヒメの祭祀が、紀和国境地帯に起つてゐることをつきとめた。この国境をはさんで、東側にも西側にも同名の丹生川が流れてゐるのは、まことに意義深い。上に掲げた四丹生神社のうち第一の大日川のは、大和側の丹生川の谷にありながら、西側の富貴谷に見出される丹生神社すなわち古の布布支の丹生（富貴の丹生）と呼ぶ。紀和国境部における丹生氏の動靜をこのように見て誤りが無いとすれば、丹生氏はここから、上記四社の配列順序通りに②③④と順を追つて東方に進展し、吉野川南方の山添いに分散したと推測される。

丹生氏は朱砂の探鉱と採掘を特技としたが、もちろんこの仕事は丹生氏に限られていたわけではない。とくにこの方面でその競争者となつたのは、吉野族であつたらしい。記紀に「尾ある人」と形容されてゐるように、非大和系と見られていた吉野族は、神武天皇に帰順したその首長を井光（井水鹿）と呼んでゐることから知られるように、やはり水銀鉱の採掘に従事してゐたと判定されるからである。現在、吉野町吉野山の桜本坊旧址と吉野郡川上村の井光部落とに残つてゐる井光（いかり）神社は、吉野族の祖神祠の名残であるが、同時に両地点とも水銀鉱床上に位置してゐる。このことも私の現地探訪と試料の科学的分析によつて確かめられた。

とくに注意されるのは、吉野山にはこのように山上に井光神社があるのに、山下の六田に丹生神社があり、一つの水銀鉱床を山上と山下の両側から利用する關係が示されてゐることであらう。このような關係こそ、上記の事情で即位した天武天皇をして、丹生神社の一つを犠牲にさせたものではあるまいか。すなわち天皇は古来のニウズヒメの祠に水の女神ミズハノメを送りこんで、吉野族が誇りとしてゐた神武天皇伝説をそのまま記念する官社に昇格させたのであらう。

それならば、天武天皇によつて丹生川上神社と化せられた丹生神社は、前記の四社のどれであつたか。

一〇 丹生川上神社の比定

丹生神社と丹生川上神社との関係から考えてみると、天武天皇が創建された丹生川上神社は、いまの吉野郡下市町の町内、すなわちもとの丹生村の下社にはかならない。この社が明治以前に丹生明神、または単に丹生神社と呼び習わされていたこと、またその鎮座地がいまもなお丹生と呼ばれ、明かに水銀地帯であり、丹生川の流れに貫かれていることは、その考えを有力に裏付けるであろう。

とはいえ、これだけの結論で私は筆をおくことができない。それほどこの神社の比定はむずかしいのである。なんとすれば、当面の問題は「皇祖神武天皇」の事蹟の一つとされていたところから、明治らしい紛糾を重ね、慎重な議論が却つて影をひそめてしまい、反対に皇祖や神事を科学的に論議することがタブーとなつていたのに便乗した言説が横行して、考証官の目をくらませてしまつた傾向が強いからである。そのために、伝説では一つの地点で行われたことになつているのに、たがいに遠くかけ離れた三つの神社が名のりをあげて、本家争いをするという、奇怪至極な情勢が導かれた。しかも定見のない大正政府は、延喜式の神名帳に丹生川上神社が大和国吉野郡の十座の一つとして、たしかに一社しか記録されていない事実から、三社に同名をなのらせて並立

させ、形だけ一社にまとめるという、実にいぶかしい結末をつけてしまつたのである。くどいようであるが、その三社を挙げると、

①吉野郡下市町（もとの丹生村）長谷に鎮座するもの。
前述のように丹生神社の②に当り、丹生明神と称せられていた。今は丹生川上神社の下社となつている。

③吉野郡川上村迫（さこ）に鎮座するもの。明治四年まで高竈神社と呼ばれ、今は丹生川上神社の上社となつてゐる。

④吉野郡東吉野村（もとの小川村）小に鎮座するもの。
前記の丹生神社④と四郷川をはさんで相對している。大正十一年十月十二日まで蟻通神社と称された郷社で、今は丹生川上神社の中社となつている。

である。どうしてこんなことになつたのであろうか。その次第をのぞいてみよう。

三社のうち明治四年にいち早く官幣大社に列せられたのは①の下社であつた。丹生明神の呼称が慣用されていたためであらう。ところがこのとき、③の川上村迫に所在する高竈神社について、この社こそ実は丹生川上神社であつて、その華表が洪水のときに下流の丹生村（下社の鎮座地）に流れつい

たから、丹生村にも同名の社があるのだ、という全く地理を無視し道理を超越した流説があり、それが採用されて高靈神社は丹生川上神社の奥の宮となつた。ついで明治二十九年九月二十日には、この奥宮を丹生川上神社の上社と改めて、ここにミズハノメを祀りこみ、それまでミズハノメを主神としていた丹生村の社を下社として、その祭神をタカオカミに改めた。つまり二社の間で祭神が勝手に交換されてしまつたわけである。ところが大正四年ごろになると、寛平七年の太政官符(後述)に見える丹生川上神社々地の四至を現在の地名に附会して、㊦の蟻通神社こそ真の丹生川上神社だと主張する説があらわれはじめたが、大正十一年十月になつて政府はこの説を取上げて郷社の蟻通神社を一躍官幣大社丹生川上神社に昇格・改称させ、これを中社と呼ぶことにした。とはいえ、事実上は中社を中核にして既存の上・下兩社をこれに附随させる形で一社の形をとらせることになつた。このときミズハノメは上社から再移転して中社の祭神とされ、上社には旧祭神のタカオカミが入り、下社は同じオカミ族(雨師)であるクラオカミの祠に改められてしまつた。

ところで、これほど思ひきつた祭神の変更や神社の急造、また社格の破天荒な昇進という大事を惹起させた理由をさぐつてみると、まことに怪しい点だらけである。とくに上社や中社の出現に有力に作用した、問題の太政官符は「類聚三代

格」巻五に収録されていて、それには、

應禁制大和国丹生川上雨師神社界地事

四至 東限塩匂 南限大山峯
西限板波滝 北限猪鼻滝

云々と書いてある。これは寛平七年(八九五年)のものであるから、明治の後葉までにはすでに一千年を経ている。いかに吉野山中とはいえ、その山河を古代と同一に見て立論してよいであろうか。ことに四至の西および北の表示に見える「滝」は、必ず落水と解する要はなく、むしろ水流のタギルことであろう。吉野地方では、現在でもなお宮滝・赤滝・黒滝などのように「滝つ瀬」の意味に使っている。「万葉集」巻六および巻七の雑歌のなかに、

隼人の、瀬戸の巖も、鮎走る、芳野の滝に、なほ如かず
けり。

馬並めて、三芳野川を、見まく欲り、打越え来てぞ、滝
に遊びつる。

とある二首を味つてみるがよい。まして古の滝つ瀬が今も消えずにあるとは、誰が証言できるか。

もうひとつ気になるのは、古代の地名を現代のそれに比定する態度そのものである。有名な伝説に関係する地名は最も戒心を要する。それはその伝説が有名であればあるほど地理比定がむずかしいからである。たとえば、その伝説の舞台を

自己にひきつけた土地では、牽強附会を敢えてして、自己の土地に伝説に関係ある地名を作りあげる。それが長い年月を経過するうちに、だんだんホンモノらしくなり、そうした錯覚のうちにニセの歴史が組上げられることも、ないとはいえない。まして大和のように歴史が古いところでは、まさに我田引水の解釈にとつて自由の天地と評してよいほどである。だから、キメテも持たずに、ただ地名の附会だけで我意を通す言説が、いままでどのくらい現われたか、いまだ喋々するまでもあるまい。明治・大正の時代に起つた丹生川上神社異変の有力な原因である。

ついでながら、この異変に大きな役割を演じた文書に触れておこう。それは、奈良春日神社所蔵の「大和国宇陀郡田地帳」のなかに、

一 雨師庄田五町 吉野郡小河雨師明神領

と見えている小河（小川）の雨師明神を蟻通神社とし、これを丹生川上神社への変造の有力な証拠としたことである。しかし、いうところの小河の雨師は、前に紹介した丹生神社の④を指すのであつて、この社が後代に他の丹生神社の例にならつて祭神をミズハノメとしたことから、雨師と呼称されたにすぎない。だから、もともとそれとは何の縁故もない蟻通神社が、丹生神社の祭神を借りて丹生川上神社への昇格に成功したわけである。まさに丹生神社と丹生川上神社との混同

の好例といわなければならない。

それよりも、私は主張したい。式内丹生川上神社の比定には、大事なことが一つ閑却されてはいないか、と。それは、丹生川上という社名が示すように、この社の鎮座する土地を流れる川が、その当時に必ず丹生川と呼ばれたこと、およびその土地もまた丹生の名があつたことの証明にほかならない。吉野川の上流の谷間にはさきこまれているうえに、どう考慮しても丹生と呼ばれた形跡のない上社（旧称タカオカミ）は、まず第一に失格である。この点では中社（旧称アリトオシ）も同様であるが、それでもいまはその撰社に転落してはいるが丹生神社が存在しているから、むかし丹生という呼称がなかつたとはいえない。これに反して、上にあげた二条件を二つながら満たすのは下社（旧称丹生明神）であろう。この社が現に丹生村にあり、丹生川に臨むことは、すでに紹介したし、これらの地名や川名が古い詩歌にしばしば見出されることは先人が指摘している。しかし、それよりも丹生川の名が延喜式時代から変つていないという証拠だけは、ここに提示しておく必要がある。それは、この川が吉野川の本流と合体する地点（奈良県五条市靈安寺）の附近に丹原という土地があつて、そこに「丹生川神社」が鎮座する事実にはかならない。この神社は延喜式に大和国宇智郡十一座の一つにあげられ、松岡静雄氏が解釈したように、丹生川を支配した神

社であつた。これこそは、丹生川上神社にとつて、最も強力なキメテではないか。式内丹生川上神社の比定問題は、明治

むすび

すくなくとも縄文時代の中期にまで遡る「朱の文化」は、太古の日本文化の主要部分であつたといつてよい。そのために「朱の女神」として誕生したニウズヒメは、カナヤマヒメやハヒメなどと並んで、数少ない鉱業関係の神として八百万神のうちでも、まことに特殊な存在であつた。

また、使用された朱は、だいたい現地自給であつたから、古代日本を代表する大和文化にとつて、宇陀の水銀は実に大きな意義をもつていた。しかもその宇陀地方は、大和のクニナカから吉野へ、またクニナカから伊勢への街道すじにあたつていたので、とくに奥宇陀の水銀地帯は、そうしたY字点をも占めて、比類ない立場を誇つたにちがひなく、そこに生れた数々の伝説は、建国の経緯を語る記紀の主要部分を形成した。

宇陀の奥に今はひっそりと静まる入谷（丹生谷）が、早くから丹生氏の一根拠となり、ニウズヒメ祭祀の一中心となつたのは、むしろ当然といえるであらう。しかし、イワレヒコが行つたカジリの話は、この奥宇陀の中心部で生れたはずであるのに、後に天武天皇の政治的配慮から、名称の類似も手

四年五月の社格制定直前の状態に戻すべきである、と私は考える。

伝つて吉野の丹生川のほとりで顕彰された。そのとき犠牲となつた一丹生神社には、ミズハノメが併祀され、やがて古来の祭神ニウズヒメは、願を貸して母屋まで占領される始末となつた。しかも後来のミズハノメは「水の女神」であるがゆえに、降雨をも支配するところじつつけられ、平安朝の正史を丹生川上雨師あるいは丹生雨師へ祈雨・祈霽の奉幣記事で賑わすことになつた。

このような経過は、他の丹生神社に伝染したばかりでなく、丹生神社と丹生川上神社との区別をさえ乱して、両種の神社が混同される傾向を強めた。すでに紹介した「二十二社註式」の記述はその好例であり、また北条執権期の撰と見られてゐる「二十二社本縁」に「丹生社の事」として、これを「大和国に坐す丹生河上の神是也」と片付けてしまつてゐるのも、そうである。とくに榛原町雨師の丹生神社は、神武の神事が宇陀で行われたとする正しい見方に立つたことから、自社を正統な丹生川上神社であり「雨師」であると主張して、ニウズヒメ祭祀の誇りを捨ててゐるのではないか。

史実のこのような歪曲に、丹生氏の衰運が深く関連するこ

とは、いうまでもないが、それは実に水銀鉱業の行詰り、ないし下火になったことに由来し、その反面における水田農耕本位への国民生活の進行によつて促がされている。全国の丹生神社のなかに、その祭神をニウズヒメからミズハノメへと交替させる傾向がはびこつていつたのも、このような事情に基くが、このとき、破壊されていくニウズヒメ祭祀を、絶滅一歩前でもなくも阻止したのは、シナから高度の知識をえて帰国した僧空海、すなわち弘法大師であつた。

彼は水銀の利用価値を高く評価して、それを寺院経済にとり入れたが、弘仁七年（八一六年）に高野山に金剛峯寺を開基すると、その主護神としてニウズヒメを奉じ、これを高野山の地主神である高野明神とともに合祀する。丹生高野明神の形で護持した。そのためにニウズヒメ祭祀は、多少の変化をうけたとはいえ、高野山の宗勢とともに拡大され、ついに今日なお紀伊一国だけでも七十数社の丹生明神ないし丹生高野明神を残すことになつたのである。私が先年公表した「紀伊における丹生都比売祭祀」の一文は、その跡をたどつたものにはかならない。

（完結）

——昭和三十九年七月十五日——

（早稲田大学教授）

註

（一）この現地調査は、昭和三十三年十一月一日、同三十五

宇陀水銀をめぐる古代史上の諸問題 松田

年十一月四・五日、同三十七年十月二十八・九日、同三十八年七月二十八日から八月一日まで、および昭和三十九年五月四・五日の五回にわたつて繰返し行われた。

（二）入谷部落の藤村愛蔵氏が保管する明治九年作製の村誌（写本）には「十戸、社一戸」とあり、同氏の記憶では一時は二十四・五戸を数えたという。

（三）「奈良県宇陀郡史料」第三編・神社、一三〇頁。大正六年、同郡役所刊。但しこの引用文は誤字・当字および仮名遣いを若干訂正してある。

（四）註2に紹介した「村誌」によれば、丹生を入字に改めたのは弘治三年のことという。また部落を流れる入谷川は、今でも一に丹生谷川と書かれている。

（五）ニウズヒメ祭祀のなかに、後代に高野山金剛峯寺の開基とともにその護持を受け、高野山勢力とともに拡がったものがある。この場合は例外とし、この論文では取扱わない。詳しくは松田寿男「紀伊における丹生都比売祭祀」早稲田大学大学院文学研究科紀要・七（昭和三十六年二月刊）、および同「丹生明神と高野明神」史観・六三（六四合冊（昭和三十七年三月刊））を見よ。

（六）丹生氏やニウズヒメ（丹生都比売）については、いままで多くの論考で明かにしたから、ここでは改めて多くの説明を加えない。次の諸論文を参照されたい。松田寿男

- 「丹生考」古代学・六ノ一（昭和三年四月刊）、同「古代東北日本の開発と水銀鉱床の役割」古代学・八ノ一～二（昭和三年三月刊）、同「古代西北日本の水銀文化」早稲田大学大学院文学研究科紀要・五（昭和三年一月刊）、同「吉野山に古史を探索」古代文化・五ノ一～二（昭和三年七月八月刊）同「古代山陽道の水銀文化」古代学・二ノ四（昭和四年三月刊）。
- (7) 「万葉集」巻六、車持朝臣千年作歌の反歌のなかに、岸の殖生とあるが、その原文は「岸乃黄土粉」である。
- (8) 松田寿男「古代東北日本の開発と水銀鉱床の役割」・二、古代学・八ノ二、一六九～一七二頁。
- (9) 丹鶴叢書（大正元年・同書刊行会刊）に収められている「草根集」巻下・四九頁。なおこの歌が詠まれたのは亨徳三年（一四五四年）すなわち足利義政將軍のときである。釈正徹は姓を紀、字を清嚴といい、号は招月。長祿二年（一四五八年）に歿した。
- (10) 松田寿男「丹生考」古代学・六ノ一、三二～三六頁。
- (11) 新訂増補「国史大系」第二部・6、一一～一二頁。
- (12) 松田寿男「阿蘇明神の誕生」古代文化・七ノ二～三。とくに三号六九～七二頁。
- (13) 大阪府南河内郡千早赤阪村水分鎮座。
- (14) 奈良県御所市（旧南葛城郡吐田郷村）関屋字水守鎮座。
- (15) 長野県更級郡八幡町水分鎮座。
- (16) 広島市の東隣、安芸郡府中町の杣原にある。
- (17) 「三代実録」三、清和天皇貞観元年九月八日の条。
- (18) 「奈良県山辺郡誌」大正五年・同郡教育会編、八九～九〇頁。
- (19) この石灯籠は文久二年の建造。別に山口神社拝殿の傍らにも「奉都祁水分上社」と刻んだ元禄五年の銘のある春日式石灯籠が残っている。なお都祁水分社が山上からここに移されたのは寛平三年（八九一年）、ここから現社地の友田に移されたのは天禄二年（九七一年）辛未の歳九月二十五日と伝えられている。「都介野村史」昭和三〇年・同編纂委員会刊、三四六頁。
- (20) 都祁水分神社には有名な「水分大明神縁起絵巻」（重要文化財）が保存されている。そのなかに「いま県の南方に雲岳あり、高水分と号す」（原和式漢文）とあつて、今の都祁山口神社の背後に聳える山が高水分山と呼ばれたことを教えている。後述の吉野の水分山（芳野水分峯）、また宇陀水分神社における高水分山（高見山）、そして葛城水分神社の場合の水越峠（むかしの水分山で、現名はその訛りであろう）を参考すると水分四神にはすべて水分山が関連している。水分神が元来は山上に配され、水を分ける神であつたことは、明かであろう。

(21) 「万葉集」巻七・雑歌のなかに「神さぶる、岩根こじしき、三芳野の、水分山を、見れば悲しも」とある。

(22) 「続日本紀」巻一、文武天皇二年四月。

(23) 「大和志料」昭和二年奈良刊・改訂版、下巻。

(24) 伴信友「神名帳考証・上代附考」(藤原春村輯) 伴信友全集・第一(明治四〇年・東京図書刊行会刊) 六三〇(一頁)。

(25) 「みくまり」と訓む。江戸時代末期まで古市場の水分神社の式能にうたわれたもので、同社に原本が伝わっていたものを昭和三十五年二月に改めて曲附して印行された。

(26) 貞観元年正月二十七日の諸神叙位の記事、および同年九月八日の祈雨の記事。

(27) 「扶桑略記」巻二〇、陽成天皇紀(国史大系巻六、六〇七頁)に見えている元慶四年十月二十日庚子の勅に「大和国十市郡百濟川辺田一町七段百六十歩、高市郡夜倍村田十町七段二百五十歩、返入大安寺。……今検両処旧地、水湿之地取為公田、高燥之处百姓居住、請依実返入、為寺家田。從之」とある。高燥之处と水湿之地、すなわち古語でいうハルとムタとがはつきり対称的に取扱われ、しかも前者は人々の居住地となり、後者が水田に利用されている情景がみごとに画きだされている。古代的な丘陵本位的生活から水田地帯へと生活の主力が移つていく過程をよく示し

ているではないか。

(28) 「奈良県宇陀郡史料」前述、三編・六〇頁。

(29) 「古事記」のこの部分の解釈については、松田寿男「丹生考」古代学・六ノ一、三三頁以下、同「古代東北日本の開発と水銀鉱床の役割」古代学・八ノ一、二九頁以下、同「吉野山に古史を探索」古代文化・五ノ一、二一三頁参照。

(30) 例えば「奈良県宇陀郡史料」(前出)第一編・二七頁、および第二編・二六頁。小字をイワレとし、磐余山あり、明治七年まで磐余社があつたという。

(31) 「群書類従」昭和七年新校本・第一巻、神祇部解題(坂本広太郎氏)による。

(32) 「群書類従」昭和七年本、神祇部・巻二、五五九頁。

(33) 松田寿男「紀伊における丹生都比売祭祀」前掲の紀要、一六六―一七一頁。

(34) 例えば「大日本史」巻二五二、神祇志の大和国吉野郡丹生川上神社の注を見よ。

(35) 新訂増補「国史大系」第二部6、昭和三十年版・一二二頁。

(36) 「奈良県宇智郡誌」大正十三年・同郡役所刊、六八頁。

(37) 「群書類従」巻二一、昭和七年新校本・第一巻、五三三頁。